ツバメ 追加 HO C 収穫祭から帰ってふたりで夕食を食べたあと、自室へ戻って買って きたものを広げた。

俺はただそれを、眺めることしかできない。

フォルを診たあとで、俺が薬草のことについて本心で、話して。ルルがそれを受け止めてくれたときから、なにかが変わった。

彼女と話すのが楽しい。 彼女が笑うと胸が波立つのを感じる。 これは、この気持ちは――。 考えてはいけない、その先はだめだ。 そう思うほどに、気持ちがはっきりと輪郭を持つ。

――これは、恋だと。

はじめは気の毒な女性だと思っていた。 けれど、それは最初の印象だ。 ルルと過ごすうちに、彼女の意志の強さを知った。 まっすぐに気持ちをぶつけられる姿がまぶしくて。 その強さの中にある弱さに惹かれて。

けれど、俺はルルに嘘をついている。

こんな俺がどうしてこの気持ちを抱ける? ルルのことを、好きだと言える? 彼女の前で笑う俺は、嘘?それとも本心だった? もう、わからない。 ぐちゃぐちゃだった。

翌日、ルルから一通の手紙を渡された。

濃紺色の封筒に金色の封蝋。 差出人には『クロラント』とだけ書かれている。 ――父からの手紙だった。 指先から冷えていく感覚になる。 俺はなんのためにここにいる? それを思い出せ、忘れてはいけない。 そう、言われているような感覚になった。

自室でそれを開けると、中には母の病状が悪化していること、急いでほしい、という内容が簡潔に書かれていた。 そして、便箋の最後には、弱い筆圧で。

「ツバメには自由に生きてほしいのに。私のために、ごめんなさい」

母の字だった。

……失いたくない。

子どものころ、どんな俺でも受け入れてくれたのは母だけだった。 でも、それを選べば、失うのはルルからの信頼だ。 使命と恋心が混ざりあった感情が俺の体を支配していく。 ベッドに横になり、思考を放棄するように意識を手放した。